愛知工業大学研究報告
第36号A　平成１3年

日本語文副詞の研究：その一
A Study of Sentence Adverbs in Japanese: Part 1

阿部幸一*
Koichi Abe

Abstract: We would like to study sentence adverbs in Japanese from the point of view of the Minimalist Program. Cinque(1997) proposes numerous functional categories to deal with many kinds of sentence adverbs on the basis of the symmetry with those of auxiliaries. Alexiadou(1997) also proposes many functional categories on the basis of Greek sentence adverbs. Nakau(1980) classifies sentence adverbs in Japanese into many types. In this article, we would like to explore how many types of sentence adverbs are necessary in order to explain the scopal difference among them on the basis of adverbs in Japanese. After examination, we would like to propose a theoreical analysis for treating sentence adverbs in general. We hope that our analysis about sentence adverbs will become a productive research in the linguistic theory.

1．0．副詞の分類

この論文では、日本語における文副詞について考察する。文副詞に関しては、通言語的に見ても、研究者により、かなり分類の仕方も、分類の方法も異なる。

例えば、Cinque(1997)では、イタリア語の（文）副詞を中心に分析して、普遍文法おける副詞に関して、次のように夥しい種類の（文）副詞の分類と、それに対応する機能範疇を仮定している。（ここで、$Mod_{volitional}$までに現れる副詞を文副詞とすると、13種類の文副詞が存在し、それ以下を述語副詞と考えると、15種類の述語副詞を仮定することになり、計28種の副詞の分類となる。）

(1) [frankly $Mood_{speech\ act}$ [fortunately $Mood_{evaluative}$ [allegedly $Mood_{evidential}$ [probably $Mod_{epistemic}$ [once T(Past) [then T(Future) [perhaps $Mood_{irrealis}$ [necessarily $Mod_{necessity}$ [possibly $Mod_{possibility}$ [usually $Asp_{habitual}$ [again $Asp_{repetitive(I)}$ [often $Asp_{frequentative(I)}$ [intentionally $Mod_{volitional}$ [quickly $Asp_{celerative(I)}$ [already T(Anterior) [no longer $Asp_{terminative}$ [still $Asp_{continuative}$ [always $Asp_{perfect}$ [just $Asp_{retrospective}$ [soon $Asp_{proximative}$ [breifly $Asp_{durative}$ [characteristically $Asp_{generic/progressive}$ [almost $Asp_{prospective}$ [completely $Asp_{SgCompletive(I)}$ [tutto $Asp_{PICompletive}$ [well Voice [fast/early $Asp_{frequentative(II)}$ [completely $Asp_{SgCompletive(II)}$
(Cinque 1997:106)

一方、方法論的にはCinque(1997)と似ているが、ギリシア語の（文）副詞を研究し、そこから普遍文法における副詞を研究したものに、Alexiadou(1997)がある。ここでは、Cinque程過激でなく、Neg2Pを境とすると、せいぜい文副詞としては四種類、述語副詞としては、四種類程度を仮定している。

(2) [DomainP financially] [RelP fortunately pu [Wh-P fortunately [MoodP probably [AgrSP cleverly [Neg2P anymore [Asp1P usually [Asp2P completely [VoiceP well]]]]]]]]
(Alexiadou 1997:171;ここでpuは補文標識を表す。)

最近の極小主義に鑑みて、代表的な両者の副詞を分析を見ると、どちらが言語分析的に正しいか、一概に言えないが、少なくとも、人間言語の言語習得理論を説明する際には、最小の装置で説明しようと考える、極小主義の立場からすれば、Alexiadouの方が望ましいと思われる。Cinqueの方では、ある意味では、分類主

* 愛知工業大学　基礎教育センター（豊田市）

義に陥ってしまって、例えば、同じcompletelyを二種類に分けたり、$Asp_{frequentative}$やその他のように、２箇所に渡る機能範疇を仮定するなど、下位区分に相当するものがある。また余り細かく分けると、分類はほとんど語彙項目の分野にまで及んでしまって、グループとしての一般的な特徴が見失われて、言語としての一般化を見失う恐れがある。但し、ここではAlexiadouの分類が正しいと言っている訳ではない。

そこで、この章及び次の章では、方法論的には、CinqueやAlexiadouのやり方に従って、日本語における文副詞を考察し、その結果から、普遍文法における副詞の扱いを考察する。が、その対象として、どれ位の種類の分類を仮定すれば、言語的に有意義な一般化ができるかを考慮しながら、論を進めることにする。

1. 1. 日本語の文副詞

Alexiadou(1997, p.7)では、従来の副詞の分類として、Jackendoff(1972), Bellert (1977), Ernst(1984)から、次の６つの文副詞を紹介している。

(3) a. evaluative adverb (fortunately)
b. conjunctive adverb (finally)
c. speaker-oriented adverb (frankly)
d. modal adverb (probably)
e. domain adverb (logically)

しかし、実際にAlexiadouが仮定するのは、この内、modal adverb, domain adverb, evaluative adverb(speaker-oriented adverbを含む), subject-oriented adverbの４種類である。1)

日本語の副詞の分析としては、中右(1980)がある。分類としては、概ねBellert(1977)に基づくが、接続副詞(therefore, however等）を副詞ではなく、接続詞として別扱いにしている。まず始めに、中右は、文副詞を命題外副詞と命題内副詞とに区別する。命題外副詞とは、命題に対するモダリティーを表現するもので、命題内副詞は命題の一部を形成すると考える。この区別は、文副詞と述語副詞の区別に相当すると仮定される。但し、いわゆる主語指向の副詞は、それ自体でモダリティーを表明するわけではないので、命題内副詞として分類している。2) しかし、その可否を論じる前に取りあえず、ここでは従来の分析同様、主語指向の副詞も文副詞の仲間として、考えて論を進めることにする。次に中右の分類を見てみる。

(4) (A) 発話行為の副詞 (Bellert(1977)ではpragmatic adverb, Cinque(1997)ではAdverb(speech act)に相当）
honestly, seriously, strictly, truthfully, candidly, confidentially, briefly, in short, in all fairness, to be blunt, to tell the truth, generally speaking, put frankly, if I may ask you, if I may say so, if you ask me
ついでながら、ちなみに、要するに、たとえば、率直に言って、本当のところ、つまりは、言わば、言ってみれば、言うなれば、どちらかと言えば、内輪の話だが、話は違いますが、おおっぴらには言えないが、ちょっとお伺いしますが、恐れ入りますが、ものは相談ですが、改めて言うまでもなく

(B) 価値判断の副詞 (Bellertではevaluative adverb, Alexiadouではevaluative adverb またはspeaker-oriented adverbと呼び、CinqueではAdverb (evaluative)に相当）
fortunately, luckily, happily, significantly, surprisingly, regretably, unfortunately, unbelievably, not surprisingly, oddly enough, interestingly enough, to my regret, to our surprise, strange to say
運悪く、あいにく、幸いにも、不幸にも、嬉しいことに、妙なことに、驚いたことに、不思議なもので、残念ながら、当然のことながら、お気の毒ですが、信じがたいことだが、悲しいかな

(C) 真偽判断の副詞 (Bellert及びAlexiadouではmodal adverb, Cinque ではAdverb(evidential)に相当）
perhaps, maybe, posssibly, probably, certainly, surely, apparently, evidently, very, likely, clearly, undoubtedly, unquestionably, no doubt, in my opinion, in my estimation, in all likelihood, to be sure, as I see it, as I understand it, as far as I know, to the best of my knowledge
おそらく、多分、もちろん、むろん、きっと、必ず、定めし、さぞ、確か、確かに、明らかに、考えるに、つらつらおもんみるに、疑いもなく、ひょっとして、もしかすると、一見（したところ）、願わくば、わたしの見るところ（では）、わたしの知るかぎり

(D) 領域指定の副詞 (Bellert及びAlexiadouではdomain adverb, Cinque ではどれに対応するか不明）
technically, theoretically, basically, fundamentally, nominally, officially, superficially, ideally, in principle,

by definition
建前としては、表向きは、名目上は、もとを正せば、根本てきには、基本的には、理想を言えば、理屈を言えば、原理上、定義上

主語指向副詞としては、次の２種を中右は仮定する。3)

(E1) 価値判断の主語副詞（Quirk *et al.* (1972) のsubject disjunctに当たる）
correctly, incorrectly, falsely, eroneously, rightly, wrongly, wisely, unwisely, cleverly, intelligently, foolishly, stupidly, reasonably
賢明にも、愚かにも、ずるがしこくも、無礼にも、不謹慎にも、大胆にも、親切にも、がんこにも、さすがに、まずいことに、ばかなことに、ばかげたことに

(E2) 様態の主語副詞 (Quirk *et al.* (1972) ではsubject adjunctに当たる）
deliberataly, intentionally, reluctantly, sadly, proudly, bitterly, resentfully, on purpose
故意に、意図的に、わざと、自ら進んで、憤慨して、誇らしく、抜け目なく、悲しげに、自信ありげに、いやいやながら、楽しそうに、物知り顔で、不本意ながら、思わずしらず、思うところがあって、期するところがあって、したり顔をして、悲痛な思いで、幸せそうな様子で

Bellertの副詞の分類に基づく、中右の日本語の副詞の文分類は、必ずしもAlexiadouの分類と一致しない。特にAlexiadouでは、中右の挙げる発話行為の副詞、Bellertの用語では、pragmatic adverbが含まれていないが、これは名称が示すように、命題から独立して、挿入的に用いられて、もっぱら文頭で用いられる点で、領域指定の副詞と似ている。またそこに含まれる副詞も類似的なので、両者を領域指定の副詞としてまとめているのではないかと思われる。領域指定の副詞を区別する理由として、Bellert(1977)は、その意味機能が制限的なuniversal quantifierとの類似性に基づいて、その必要性を訴えている。例えば、次の文では、話者は与えられた領域の中で、命題が真であると主張するが、他の領域では命題の真偽についてはコミットしていないという。

（5）a. Linguistically, this example is interesting.
b. Mathematically, there is no answer to your queston.

発話行為の副詞と領域指定の区別をする必要があるか否かについては、後で議論することにするが、私見では、linguisticallyやmathematicallyといった領域指定の副詞は、linguistically speaking やmathematically speakingのように、発話行為の副詞に言い換え可能な点で、発話行為の副詞と一緒に考えうるのではないかと考える。

また、Alexiadouではspeaker-oriented adverbをevaluative adverbと同一としているが、人により別と考える人もいる。よって、少し用語上の混乱をきたすように見える。これは、Jackendoff(1972)での副詞の分類が、文副詞として話者指向の副詞と主語指向の副詞だけでは、不十分すぎるとの批判に基づき、色々な下位区分が仮定されたが、その過程で用語だけがJackendoffのまま残ったことによると思われる。（また領域指定の副詞については、Jackendoffは考慮さえしてない。）したがって、話者指向の副詞をevaluative, modal, pragmaticに三分割するBellert(それに基づく中右）では、話者指向の副詞という名称はないが、同じく話者指向の副詞をdomain, modal, speaker-orientedに三分する Alexiadouでは、旧来の話者指向の名が残っている。しかし、Bellertのevalutative adverbもAlexiadouのspeaker-oriented adverbも共に、「話者の命題に対する価値判断を示す」ので、同様であると考えられる。問題は、さらに分化が必要かどうかである。4)

Bellertの分類に基づく中右は、価値判断の副詞と真偽判断の副詞の違いを、「真偽判断の副詞は話者の発話時の心的態度を示すが、常に肯定的な値を持つ、一方、価値判断の副詞は、命題の叙述する状況に対して下されるので、否定的な文脈でも可能」としている。例えば、次の例で真偽判断の副詞が、用いられているが、undoubtedlyの方は形は否定でも、意味は肯定的なので可能。一方、doubtedlyの方は、形態上は否定を含まないが、意味的には否定的なので、容認不可能としている。

（6）a. Undoubtedly, mushrooms are great for diets.
b.*Doubtfully, mushrooms are great for diets.

よって、両者の区別が言語学的に有効するとするな

ら、この区分をする必要がると思われる。これについも、後で考察することにする。

また、Cinqueの場合は話者指向副詞に関して、更に一区分加わり四分割されている。5) すなわち、speech act, evaluative, evidential, epistemicの四種である。この内、epistemicについては、少々問題を生じさせる。従来、Jackendoff(1972)にも見られるように、法助動詞と副詞の意味的な類似性から、法助動詞の陳述緩和用法と根源的用法を、副詞にも当てはめようという試みがなされてきた。

中野（1977, p357ff）では、「陳述緩和的法助動詞は、文の命題が表す事態に対する『話者の』心的態度ないしは論評を表す点で、話者指向的である」としている。しかし、Cinqueの仮定するepistemic adverbは従来の話者指向の副詞の下位区分の一部でしかない。ここでは、狭義の陳述緩和副詞と指摘するに留める。もし、狭義の陳述緩和の副詞を仮定するとなると、（４Ｃ）の分類の一部を独立させることになると思われる。更に、Cinqueは、epistemic adverbの下に、irrealis、necessisty、possibilityの区別を加えている。しかし、こういった細かい細区分は、先入観かもしれないが、法助動詞の意味の分類を、副詞にまで敷衍しているだけで、実際そういった区分が副詞について必要あるという保証はどこにもない。特に、 irrealis、necessisty、possibilityの成員には, 次に見られるように大変限られており、ほとんど語彙的な区別となって、意味的な分類になっていないように思われる。

(7) a. irrealis --- perehaps (たぶん、おそらく)
b. necessity --- surely, to be sure (きっと、必ず、確実に)
c. possibility --- possibly, in all likelihood (ひょっとして、もしかすると)

例えば、(7a,b,c)の区別を実際の日本語の例に当てはめて考える。プロタイプ文として、「田中さんは、明日学校に来るだろう。」を考える。

(8) a. たぶん、きっと、もしかすると、田中さんは明日学校に来るだろう。
b. きっと、たぶん、もしかすると、田中さんは明日学校に来るだろう。
c. たぶん、もしかすると、きっと、田中さんは明日学校に来るだろう。

私の直感では、（もちろん語彙としての意味の違いは存在するが）、三つのグループに分ける程の違いもなく、その成員の数も少ないので、この三つに下位区分することには反対である。

残る陳述緩和の副詞の分類については、真偽判断の副詞の一部を形成すると思われるので、すると次のように下位区分されると仮定する。

（９）(A) 真偽判断の副詞 --- apparently, evidently, clearly, undoubtedly, unquestionably, no doubt, allegedly, reportedly
確かに、明らかに、疑いもなく、

(B) 陳述緩和の副詞 --- perhaps, maybe, probably, certainly, likely, supposedly, presumably, in my opinion, in my estimation, as I see it, as I understand it, as far as I know, to the best of my knowledge
おそらく、多分、もちろん、むろん、定めし、さぞ、確か、思うに、考えるに、つらつら思うに、一見（したところ）、願わくば、わたしの見るところ（では）、わたしの知るかぎり

真偽判断の副詞の成員が数が少ないように思われるが、取り合えずこの区分を仮定することによって、論を進めることにする。

次に、主語指向の副詞に移ると、中右では二分することを主張し、一方Cinqueは、根源的法助動詞の対応から、root (volitional/ obligation/ ability/ permission)の四種類を主語指向の副詞を仮定しているが、その他の研究者では主語指向の副詞の分割を主張している人はいないと思われる。もしCinqueの四分割を採用すると、中右の二分割をさらに分割することになるが、irrealisの区分の場合と同様、副詞に法助動詞に対応する区別がある保証はない。その成員も実際には、不明。よってここでは、中右の二分割された主語指向副詞を仮定するに留める。

日本語の文副詞の分類として、ある程度目安を決めて検討すると、概ね次のようになると思われる。これは、中右の分析に、一部Cinqueの分析を加えたものに過ぎない。そして中右の日本語の分類を当てはめて、階層的に並べると、取りあえず次の七種類になると思われる。

(10) a. 発話行為の副詞(speech act adverb) = (4A)
b. 領域指定の副詞(domain adverb) = (4D)
c. 価値判断の副詞(evaluative adverb) = (4B)
d. 真偽判断の副詞(evidential adverb) = (9A)
e. 陳述緩和の副詞(epistemic adverb) = (9B)
f. 価値判断の主語副詞 = (4E1)
g. 様態の主語副詞 = (4E2)

1. 2.

ここでは、(10)の仮定された階層が、実際の日本語の文副詞にも当てはまるかどうか、検討する。すべての文副詞の（組み合わせによる）関係について触れることができないで、作用域の階層性に鑑みて、階層性の上下関係から見て考察することにする。テストは、プロトタイプの文に、それぞれの階層の上下の文副詞を入れて、次に両者を入れ替えた時に、文法的な違いが見られれば、それは有効な階層性を成すと考える。

まず、始めに発話行為の副詞と領域指定の副詞の階層性を考察する。プロトタイプ文としては、次の三文を仮定する。

(11) a. 田中さんは、君の意見を聞き入れるだろう。
b. 田中さんは、その木を切るつもりでいる。
c. 田中さんは、お酒をたくさん飲む。

網羅的にすべて副詞の組み合わせを想定することは不可能なので、中右の列挙している発話行為の副詞と領域指定の副詞の順列を、そのまま対応関係としてとり、その作用域関係を調べて見たのが、次の表である。（作用域の差を示す前半部分は、その語順を順序どおり適用した場合、一方後半部分は、入れ替えた時の作用域を示す。）

(12)

発話行為の副詞	：領域指定の副詞6)	
ついでながら	>;?<	建て前としては
ちなみに	>;?<	表向きは
要するに	>;?<	名目上は
たとえば	?>;?<	もとを正せば
率直に言って	>;(?)<	根本的には
本当のところ	>;(?)<	基本的には
つまりは	?>;?<	理想を言えば
言わば	>;?<	理屈を言えば
言ってみれば	>;?<	原理上
言うなれば	?>;?<	定義上

具体例として、次のものを示す。

(13)
a.ついでながら、建て前としては、
(speech act) (domain)
田中さんはその木を切るつもりでいる。
b.?建て前としては、ついでながら、
(domain) (speech act)
田中さんはその木を切るつもりでいる。
c.要するに、名目上は、田中さんは、
(speech act) (domain)
君の意見を聞き入れるだろう。
d.?名目上は、要するに、田中さんは、
(domain) (speech act)
君の意見を聞き入れるだろう。
e.率直に言って、根本的には、
(speech act) (domain)
田中さんはお酒をたくさん飲む。
f.(?)根本的には、率直に言って、
(domain) (speech act)
田中さんはお酒をたくさん飲む。

このテストでは、元となるプロトタイプ文の選択の問題と、また意味的に発話行為の副詞と領域指定の副詞の組み合わせがおかしい場合もあるが、表に示すように、日本語の文副詞の際には、発話行為の副詞の方が、領域指定の副詞よりも、作用域が広いように思われる。直感的には、領域指定の副詞は、発話行為の下位区分のように思われたが（1.1参照）、作用域に関して両者には違いが見られるので、別の区分とした方が良いようである。機能的に言っても、発話行為の副詞は、Bellertではpragmatic adverbと呼ぶように、文のレベルを越えた分野に属すと思われるのに対し、領域指定の副詞は、文の意味範囲の指定をしている点で、区別できると思われる。

次に、領域指定の副詞と価値判断の副詞の作用域関係について見る。プロトタイプ文として、次のものを仮定する。

(14) a. 田中さんは、君の意見を聞き（入れる／入れない）だろう。
b. 田中さんは、その木を切るつもりでいる。
c. 田中さんは、お酒をたくさん飲む。

(15)

領域指定の副詞	：価値判断の副詞	
建て前としては	(?)>;(?)<	運悪く
表向きは	(?)>;(?)<	あいにく
名目上は	>;(?)<	幸いにも
もとを正せば	(?)>;(?)<	不幸にも
根本的には	?>;?<	嬉しいことに
基本的には	?>;?<	妙なことに
理想を言えば	?>;?<	驚いたことに
理屈を言えば	?>;?<	不思議なもので
原理上	?>;?<	残念ながら
定義上	>;?<	当然のことながら

具体例として、次のを挙げる。

(16)

a.(?)建て前としては、運悪く、田中さんは、
(domain) (evaluative)
その木を切るつもりでいる。

b. (?)運悪く、建て前としては、田中さんは、
(evaluative)(domain)
その木を切るつもりでいる。

c. (?)表向きは、あいにく、田中さんは、
(domain)(evaluative)
君の意見を聞き入れないだろう。

d.(?)あいにく、表向きは、田中さんは、
(evaluative) (domain)
君の意見を聞き入れないだろう。

e. (?)もとを正せば、不幸にも、田中さんは、
(domain) (evaluative)
お酒をたくさん飲む。

f. (?)不幸にも、もとを正せば、田中さんは、
(evaluative)(domain)
お酒をたくさん飲む。

意味的な関係なのか、私の判断に関する限り、領域指定の副詞と価値判断の副詞の作用域関係については、明確な区分があるようには思われない。一つには、領域指定の副詞が話者指向の副詞の一部として、話者の言質の領域を指定するのに対し、同じく話者指向の副詞の一部である、価値判断の副詞が文に対して話者の価値判断を述べる点で、意味的な作用の仕方には違いはある。しかし、作用域に違いが見られないことから、両者は同じグループに属すと仮定しても良いのでないかと思われる。

しかし、次の表に見られるように、発話行為の副詞と価値判断に副詞の間には、作用域に関して、明らかな違いが見られるので、少なくとも、発話行為の副詞＞領域指定の副詞／価値判断の副詞という階層性は存在するように思われる。プロトタイプ文として、次の文を仮定する。

(17) a. 田中さんは、その木を切るつもりでいる。
b. 田中さんは、けい子に会った。
c. 田中さんは、お酒をたくさん飲む。

(18)

発話行為の副詞	：価値判断の副詞	
ついでながら	>;?<	運悪く
ちなみに	>;?<	あいにく
要するに	?>;?<	幸いにも
たとえば	?>;?<	不幸にも
率直に言って	>;?<	嬉しいことに
本当のところ	>;?<	妙なことに
つまりは	>;?<	驚いたことに
言わば	?>;?<	不思議なもので
言ってみれば	>;?<	残念ながら
言うなれば	>;?<	当然のことながら
どちらかと言えば	>;(?)<	お気の毒ですが
内輪の話だが	>;?<	信じがたいことだが
話は違いますが	>;(?)<	悲しいかな

具体例として、次のを挙げる。

(19)

a. 率直に言って、驚いたことに、
(speech act)(evaluative)
田中さんはその木を切ってしまった。

b. ?驚いたことに、率直に言って、
(evaluative)(speech act)
田中さんはその木を切ってしまった。

c. ついでながら、あいにく、田中さんは、
(speech act) (evaluative)
お酒をたくさん飲む。

d. ?あいにく、ついでながら、田中さんは、
(evaluative) (speech act)
お酒をたくさん飲む。

e. 内輪の話だが、残念なことに、
(speech act) (evaluative)

田中さんは、けい子に会った。
f. ?残念ながら、内輪の話だが、
(evaluative) (speech act)
田中さんはけい子に会った。

次に、価値判断の副詞と真偽判断の副詞の作用域の違いを見てみよう。プロトタイプ文としては、(20)を仮定し、その判断を示したのが、(21)の表である。

(20) a. 田中さんは、その木を切るだろう。
b. 田中さんは、けい子に会ったようだ。
c. 田中さんは、お酒をたくさん飲むらしい。

(21)
価値判断の副詞　：真偽判断の副詞

運悪く　>;?<　確かに
あいにく　>;?<　明らかに
幸いにも　(?)>;?<　疑いもなく
不幸にも　>;?<　確かに
嬉しいことに　>;(?)<　明らかに
妙なことに　(?)>;(?)<　疑いもなく
驚いたことに　>;?<　確かに
不思議なもので(?)>;?<　明らかに
残念ながら　>;?<　疑いもなく
当然のことながら>;?<　確かに
お気の毒ですが　>;?<　明らかに
信じがたいことだが>;?<　疑いもなく

具体例として、次を参照。
(22)
a.運悪く 、確かに、田中さんは、
(evaluative)(evidential)
けい子に会ったようだ。
b. ?確かに、運悪く、田中さんは、
(evidential)(evaluative)
けい子に会ったようだ。
c. あいにく、明らかに、田中さんは、
(evaluative)(evidential)
お酒をたくさん飲むらしい。
d. ?明らかに、あいにく、田中さんは、
(evidential)(evaluative)
お酒をたくさん飲むらしい。
e. 驚いたことに、確かに、田中さんは、
(evaluative)(evidential)
けい子と会ったようだ。
f. ?確かに、驚いたことに、田中さんは、
(evidential)(evaluative)
けい子と会ったようだ。

真偽判断の副詞の多くが、Cinqueの区分に移ってしまった為に、その成員が少ないので、一概には言えないものの、価値判断の副詞は真偽判断の副詞よりは作用域が広そうである。問題は、Cinqueの言うように、真偽判断と陳述緩和の副詞を区別する必要があるかどうかである。次に両者の作用域を比べて見る。

プロトタイプ文としては、次のを仮定する。
(23) a. 田中さんは、君の意見を聞き入れるだろう。
b. 田中さんは、けい子に会った／会ったらしい。
c. 田中さんは、その木を切るだろう。

(24)
真偽判断の副詞：陳述緩和の副詞
確かに　>;?<　おそらく
明らかに　>;(?)<　多分
疑いもなく　(?)>;<　もちろん
確かに　>;(?)<　むろん
明らかに　>;(?)<　きっと
疑いもなく　>;?<　定めし
確かに　?>;?<　さぞ
明らかに　?>;?<　確か
疑いもなく　?>;?<　考えるに

具体例としては、次を参照。
(25)
a. 確かに、おそらく、田中さんは、
(evidential)(epistemic)
けい子に会ったらしい。
b. ?おそらく、確かに、田中さんは、
(epistemic)(evidential)
けい子に会ったらしい。
c.(?)疑いもなく、もちろん、田中さんは、
(evidential) (epistemic)
その木を切るだろう。
d. もちろん、疑いもなく、田中さんは、
(epistemic) (evidential)
その木を切るだろう。

e. ?明らかに、さぞ、田中さんは、
(evidential)(epistemic)
君の意見を聞き入れるだろう。
f. ?さぞ、明らかに、田中さんは、
(epistemic)(evidential)
君の意見を聞き入れるだろう。

(25)の例から分かるように、判断が微妙で、中には作用域が逆転するのも見られる。これは、元々真偽判断の副詞を、純粋の真偽判断の副詞と陳述緩和の副詞に二分したことによる。Cinqueのように、法助動詞の表す意味に基づいて、副詞の意味も区分すると、こういうことになると思われるが、理論的には可能であっても、言語事実に関する限り、両者を区別する必要はないのではないかと思われる。

尚、価値判断の副詞は、陳述緩和の副詞よりは、作用域は広いように思われる。ここでは、具体例のみ取り上げる。

(26)
a. 運悪く、おそらく、田中さんは、
(evaluative)(epistemic)
その木を切るだろう。
b. ?おそらく、運悪く、田中さんは、
(epistemic)(evaluative)
その木を切るだろう。
c. あいにく、多分、田中さんは、
(evaluative)(epistemic)
けい子に会ったようだ。
d. ?多分、あいにく、田中さんは、
(epistemic)(evaluative)
けい子に会ったようだ。

以上のことから、いままで仮定した文副詞の階層としては、次のような三層になると思われる。
(27) 発話行為の副詞＞{領域指定の副詞／
価値判断の副詞}＞{真偽判断の副詞／
陳述緩和の副詞}

残るは{陳述緩和の副詞と価値判断の主語副詞}と様態の主語副詞の作用域を検討することになるが、話者指向の一つである陳述緩和の副詞が、主語指向の副詞である価値判断の主語副詞と様態の主語副詞よりも作用域が広いのは、従来どおりと思われるので、ここでは価値判断の主語副詞と様態の主語副詞の作用域を中心に考えたいと思う。

中右の定義によると、脚注の3)に示したように、価値判断の主語副詞が命題の外にあるのに対し、様態の副詞は命題内にあるという。その統語的にも違いが見られるというが、果たして作用域に関して違いが見られるだろうか。いままでと同様に、並べ換えのテストで、その作用域の違いを調べてみることにする。プロトタイプ文としては(28)を仮定する。

(28)a. リンダは、野生のマッシュルームを食べた。
b. 彼らは、その賞を受けた／受けなかった。
c. 彼は、その申し出を受け入れなかった。

(29)

価値判断の主語副詞	：様態の主語副詞
賢明にも	>;(?)< 故意に
愚かにも	>;(?)< 意図的に
ずるがしこくも	>;< わざと
無礼にも	>;< 自ら進んで
不謹慎にも	>;(?)< 憤慨して
大胆にも	>;?< 誇らしく
親切にも	?>;?< 抜け目なく
がんこにも	?>;?< 悲しげに
さすがに	>;?< 自信ありげに
まずいことに	>;< いやいやながら
ばかなことに	(?)>;?< 楽しそうに
ばかげたことに	(?)>;(?) 物知り顔で
賢明にも	?>;?< 不本意ながら
愚かにも	>;?< 思わずしらず
ずるがしこくも	(?)>;(?)< 思うところがあって
無礼にも	>;< 期するところがあって
不謹慎にも	>;< したり顔をして
大胆にも	>;< 悲痛な思いで
親切にも	?>;?< 幸せそうな様子で

具体例として、(30)を参照。
(30)
a. 賢明にも、故意に、彼は、
(Subject-oriented=SO(evaluative))
(SOmanner)
その申し出を受け入れなかった。
b. (?)故意に、賢明にも、彼は、
(SOmanner)(SOevaluative)

その申し出を受け入れなかった。

c. 無礼にも、自ら進んで、リンダは、
(SOevaluative)(SOmanner)
野生のマッシュルームを食べた。

d. 自ら進んで、無礼にも、リンダは、
(SOmanner)(SOevaluative)
野生のマッシュルームを食べた。

e. まずいことに、いやいやながら、彼らは、
(SOevaluative (SOmanner)
その賞を受けた。

f. いやいやながら、まずいことに、彼らは、
(SOmanner) (SOevaluative)
その賞を受けた。

判断は、上で見た真偽判断の副詞と陳述緩和の副詞の場合と同様、明確でなく、作用域の違いが見られない場合や、意味的に両者の結び付きが許されないなど、中右の指摘する統語的な違いはあるにしても、意味的には少なくとも、価値判断の主語副詞と様態の主語副詞とを区分する必要はないように思われる。もし、両者を区別する必要があれば、主語指向の副詞の下位区分として、区別する必要は認めるが、副詞の主たる機能である意味の及ぼす範囲、つまり、作用域に関しては、区分する必要はないように思われる。

以上を総括すると、文副詞としては、四（又は七）種類、四階層を仮定すれば良いと思われる。

(31) 発話行為の副詞>{領域指定の副詞／
価値判断の副詞}>{真偽判断の副詞／
陳述緩和の副詞}>{価値判断の主語副詞／
様態の主語副詞}

(31)の分類は、奇しくもAlexiadouの分類(2)と類似しているが、その分岐点が少々ずれていて、Alexiadouの仮定するdomain adverbの中には、ここでいう発話行為の副詞と領域指定の副詞が含まれ、speaker-oriented adverbは価値判断の副詞に対応し、modal adverbは真偽判断の副詞と陳述緩和の副詞の両方を含み、subject-oriented adverbはそのまま、価値判断の主語副詞と様態の主語副詞の両方を含む。どこを区分するかという問題は残るが、少なくとも普遍文法のレベルでは、文副詞に関しては、四階層を仮定すれば良いということのように思われる。

1．3．まとめ

ここでは、日本語の文副詞の作用域をめぐる研究から、日本語の文副詞には四つの階層があることが分かった。次の論文では、その階層性を説明する原理を、考察する予定である。

注1）conjunctive adverbはAlexiadouではその後、言及されていないが、中右の考察同様、副詞としては異質なので、接続詞として別にしているのかも知れない。

2）主語指向の副詞を他の文副詞とは、独立したものと考えるものには、鈴木(1979)にもみられる。

3）中右によると、価値判断の主語副詞と様態の主語副詞の違いは、次のように表される

(i) 価値判断の主語副詞：（命題外）
a. 主語の行為との関連において、話者の価値判断を叙述するもの。
b. 修飾する命題内容の文から独立して、生ずることができる。
c. 命題内否定の作用域に生ずることはできない。
d. 命題内否定の作用域外に自由に生ずることができる。
e. 直接・間接疑問文に生ずることができない。

(ii) 様態の主語副詞：（命題内成分）
a. 命題内否定の焦点になることができる。
b. 命題内否定の作用域外に自由に生ずることができない。
c. 直接・間接疑問文に生ずることができる。
d. 分裂文の焦点の位置に生ずることができる。

4）中右は、(A), (B), (C)がJackendoff (1972)のspeaker-oriented adverbに相当するとし、(A), (B), (D)がGreenbaum (1969)のattitudinal disjunctで、(C)がstyle disjunctに相当するとしている。

5）Cinqueの文副詞の下位区分は、次に見られるように、階層性をなすと考えられている。

(i) Speech act adverbはevaluative adverbに先行する。
a. Honestly I am unfortunately unable to help you.
b.*Unfortunately I am honestly unable to help you.

(ii) Evaluative adverbはevidential adverbに先行する。
a. Fortunately, he had evidently had his own opinion of the matter.

b.*Evidently he had fortunately had his own opinion of the matter.

(iii) Evidential adverbはepistemic adverbに先行する。

a. Clearly John probably will quickly learn French perfectly.

b. *Probably John clearly will quickly learn French perfectly.

(iv) Epistemic adverbは(past) tense adverbに先行する。

Probably he once had a better opinoin of us.

(v) Tense adverbはperhaps/(almost)certainlyに先行する。

a. He was then almost certainly/perhaps at home.

b. *He was almost certainly/perhaps then at home.

(vi) Perhapsはsubject-oriented adverbよりも先行する。

a. John will perhaps wisely withdraw.

b. *John will wisely perhaps withdraw.

この内、(iv)は時制の副詞と関わっているが、もし時制の副詞が述語副詞とすれば、この階層性は予測されると思われる。その他の階層性については、日本語の場合に確認するが、(vi)については問題がありそうに思われる。

6) 記号の< , > は作用域の広さを示す。> は、左に来るものが作用域が広いことを示し、< は、右に来るものが作用域が広いことを示す。実際には問題の副詞の語順を入れ替えた時に、文が文法的かどうかの判断を中心に考える。?は意味的に不適格であることを示す。

（尚、参考文献は次の論文に記載するため、ここでは省略する。）

（受理　平成13年３月19日）